

音楽診断

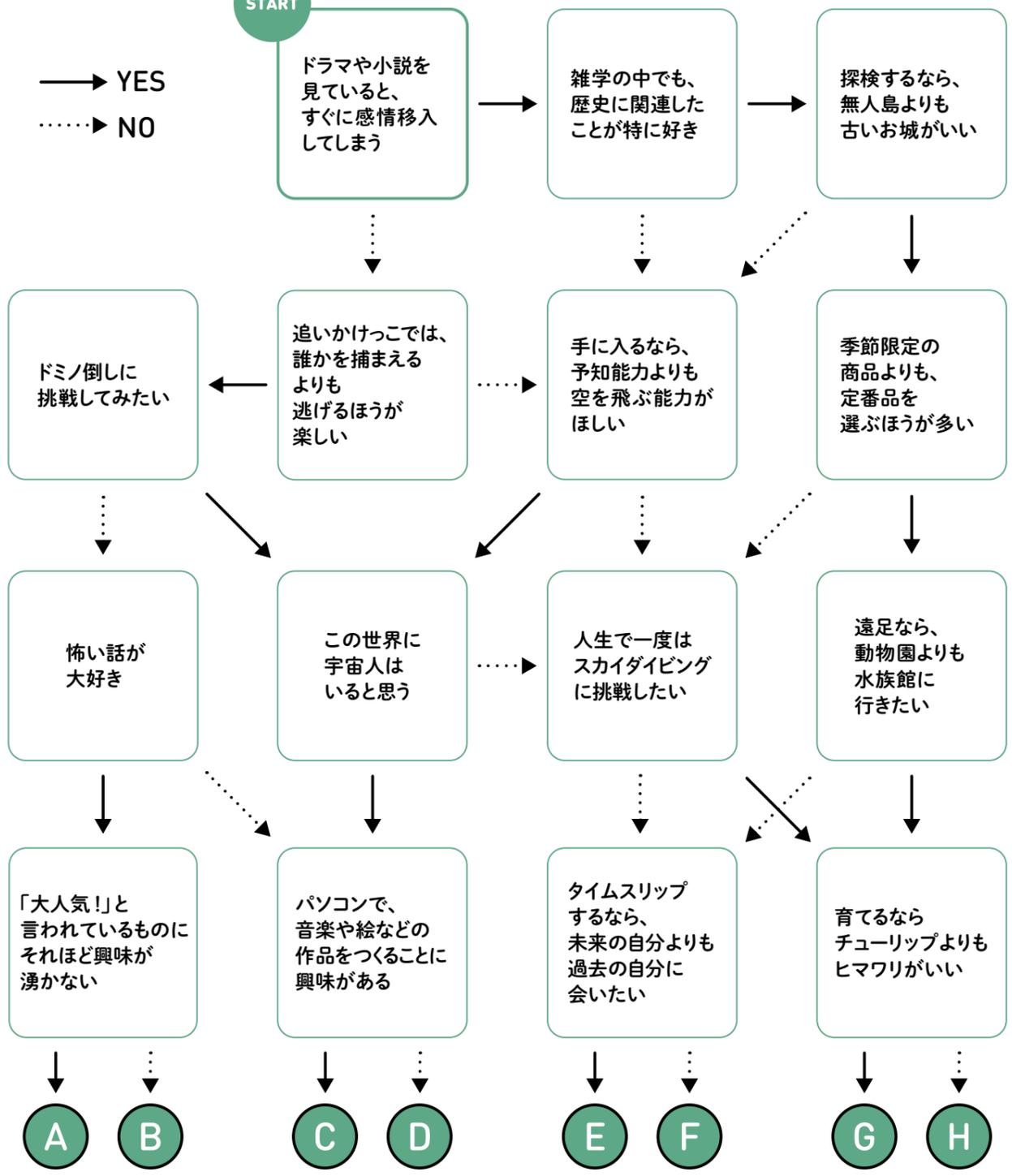
第15回 名作映画音楽編 洋画編

『ヴァン』オリジナルでお届けする音楽診断企画の第15弾。
今号は名作と呼ばれる8本の映画から、
あなたにおすすめの映画音楽をご紹介します。

監修・解説 = 小沼純一
Text = Junichi Konuma



START



あなたにぴったりの映画音楽は？

A モダンジャズの効いた新たなサスペンス
『死刑台のエレベーター』
(1958年/フランス)
作曲:マイルス・デイヴィス

ある殺人事件が都市にひろげる波紋。ラッシュ・フィルムをみながら、最小限の決めごとのみでなされる即興演奏。ストーリーのみでなく、映像と音楽もあわせてのサスペンスが、ここに生まれた。音楽は20世紀音楽史上はずすことのできないマイルス・デイヴィス(1926-1991)。映画の新しい潮流、ヌーヴェル・ヴァーグ*とジャズとが結びつき、都市の孤独、若者の無節操、クルマのスピードが結びつく。*フランスで起こった映画運動



B 軽快なサウンドが楽しい西部劇
『荒野の七人』
(1960年/アメリカ)
作曲:エルマー・バーンスタイン

黒澤明監督作品『七人の侍』(1954)を、開拓時代のメキシコに移植した西部劇。ヴァイオリンのあかるく勇壮なメロディー、バックの木管・金管・打楽器のリズム、金属系打楽器のきらきらしたアクセント。音楽はエルマー・バーンスタイン(1922-2004)。「ウエストサイド・ストーリー」を作曲、指揮者としてよく知られたレナード・バーンスタインとは別人なので要注意。『大脱走』(1963)も有名。



C 壮大な物語と大編成オーケストラ・サウンド
『スター・ウォーズ』
(1977年~/アメリカ)
作曲:ジョン・ウィリアムズ

ハリウッド本流の活劇をSFに移しかえた成功作。かつてエーリヒ・コルンゴルド(1897-1957)という作曲家がいた。オーストリアで神童と呼ばれる作曲家だが、ユダヤ系だったためアメリカに亡命。映画音楽の作曲家となった。そのサウンドがジョン・ウィリアムズ(1932-)の手で、1970年代のSF活劇に、ヴァージョン・アップした迫力で、復活する。キャラクターそれぞれに音楽が割りふられているのも特徴だ。



D 世界中から愛されるキャラクターと名曲
『ピノキオ』から「星に願いを」
(1940年/アメリカ)
作曲:リー・ハーライン

ディズニー・アニメーションから生まれたスタンダード・ナンバー。イタリアの作家カルロ・コッローディの名作『ピノキオの冒険』をもとにしながら、かなり変更を加え、ディズニーがアニメ化したのは1940年。曲はコロロギのジミニ・クリケットがはじめとおわりに歌う。ポピュラー/ジャズのスタンダードとして現在もさかんに演奏されている。リー・ハーライン(1907-1969)は初期ディズニー・アニメの音楽を多く担当した人物として知られる。



E 人に寄り添う旋律と物語
『ニュー・シネマ・パラダイス』
(1988年/イタリア=フランス)
作曲:エンニオ・モリコーネ

映画そして映画館がかつて持っていた輝きと夢を描きだすドラマ。映画のストーリーをもちたて、効果をつくりだすだけではなく、映画をみるひとに寄り添い、なかにはいりこんでゆく音楽がある。エンニオ・モリコーネ(1928-2020)は全篇で、みるひとにとって、映像と音楽が切り離しがたくなる映画 = 音楽を生みだしている。ことばにならない、愛すること——故郷を、映画を、ひと、を、そっと教えてくれないか。



F 広く知られたシンセサイザーの音楽
『炎のランナー』
(1981年/イギリス)
作曲:ヴァンゲリス

走ることの意味と価値のちがいを浮き彫りにするスポーツドラマ。オーケストラでも、バンド演奏でもない、シンセサイザーを中心に据えてひびかせた音楽は、この映画のテーマ曲をとおり、広く知られるようになった。折しもテクノ・ポップなどもクローズアップされた時期である。ヴァンゲリス(1943-2022)は翌1982年、まったく異なったタイプのSF映画『ブレッドランナー』でも、電子的なサウンドを全篇でひびかせた。



G 音楽で彩られた異色の恋愛ドラマ
『シェルブールの雨傘』
(1964年/フランス=西ドイツ)
作曲:ミシェル・ルグラン

恋愛と家庭、社会、手元のお金——音楽に包まれて。甘美なメロディー、ジャジーなリズム、色彩豊かなサウンド。何度もくりかえしあらわれるテーマ。芝居のセリフがすべて歌われるのがオペラ、要所要所でうたがはいってくるのがミュージカル。それらが総合され、切れ目なく音楽がひびいている画期的な映画。背景にあるアルジェリア戦争がもたらす傷も重要。映画監督ジャック・ドゥミ(1931-1990)と作曲家ミシェル・ルグラン(1932-2019)のコンビによる記念碑的作品。



H 人間ドラマと豊かなオーケストラ
『風と共に去りぬ』から「タラのテーマ」
(1939年/アメリカ)
作曲:マックス・スタイナー

南北戦争で変化する人びとを描く巨篇。テーマ冒頭、ヴァイオリンが奏する幅広い音程が、映画が描きだすアメリカ南部の広大さと呼応する。メロディーのうごきにすこし遅れてホルンの高音域が、この立体感を強調。アメリカ史の一端をみてとることもできる一大叙事詩だ。マックス・スタイナー(1888-1971)はオーストリア出身、アメリカにわたり、『キング・ kong』(1933)、『カサブランカ』(1942)などの映画の音楽も手掛けた。



小沼純一

音楽を中心にしながら、文学、映画など他分野と音とのかかわりを探る批評をおこなう。現在、早稲田大学文学学術院教授。批評的エッセイとして『本を弾く来るべき音楽のための読書ノート』『武満徹追憶』『音楽に自然を聴く』『映画に耳を聴覚からはじめる新しい映画の話』ほか、創作に『sotto』『しっぽがない』『ふりかえる日、日めいのレッスン』ほか。編著に『武満徹エッセイ選』『高橋悠治対談選』『ジョン・ケージ著作選』『柴田南雄著作集Ⅰ~Ⅲ』ほか。2015-6年にはシンガポール、ソウル、東京でおこなわれた国際交流基金主催のコンサート『村上春樹を「聴く」』の監修もおこなった。NHK Eテレ『schola(スコラ) 坂本龍一 音楽の学校』(2010-2014)のゲスト講師としても出演。